

目的 明治期における服装の変遷について、特に洋服の導入は、時期や紹介者、着用者などの地域差が大きく、その実態はきわめ難い。明治5年、わが国に始めて学制が布かれ、学校教育の第一歩が踏み出された。寺小屋式の教室から、洋風建築→机といすの教室が徐々に整えられていったといわれる。服装については、おおもむね従来の和装であり、学童が洋服を着始めた時期はまちまちであった。

ここに明治10年ごろ、小学校男子制服として着用された上衣2着、下衣1着の洋服の貴重な資料を得たので、その着用に至った地域の文化、教育、経済等の事情を重ね合わせて研究調査し、資料の実測による復元を試みたものである。

方法 実物資料の型、材料、寸法、縫製、付属品等について計測し、考察し、当時の史実との照合を試みた。

結果 この服が着用された奈良県吉野郡一帯は、古来良質の杉、檜材の産出に恵まれ、財力の極めて大きな土着の資産家が多くあつたところである。その人々は新しい文化や教養に早くから接し、教育の面でも積極的に協力、推進した。その一端が、この地域における教育活動の充実や、小学校制服の寄贈となつてあらわれたものと考察された。

資料の型は、フロックコート型上衣と、長不ホソである。表布は3尺とも手紡糸の緯糸の太い厚地の紺木綿を用いている。上衣の裏は起毛ネルと思われ、不ホソの裏は目の粗い木綿がつけられ、右、総裏である。胸の内ホックもつけられ、胸ぐせも充分とられている。比較的細身に作られ、全体に明治初期のシルエットがよく出ている。